

ビブリオテークに時代を見た

"salle de lecture Henri Labrouste, 1867; Bobliothèque nationale de France"
 細い鉄柱の柱に支えられ繊細な天蓋を戴いた、フランス国立図書館の閲覧室の内部である。"Henri Labrouste" (アンリ・ラブルスト)とは、19世紀の初めのフランスの建築家で、ごく一般的な建築史にも登場する大切な人物である。古代神殿の調査を経た後に、当時のアカデミーの大勢に背いて、建築のデザインは、環境や社会に応じて変化すべきだと説いたひとりだった。初めて鉄を使った公共建築のひとつとして、1940年ごろ、パリに"Ste-Geneviève" (サン・ジュンヴィエーブ) 図書館をつくり名声を確立した。

タイトルの"salle" (サル)とは部屋のことで閲覧室の室にあたる。"lecture"とはというと、われわれが普段使いなれているレクチャーという言葉がもつ、講演とか講義といった意味、では通じなくもないけれど、ちょっと無理があるようだ。英語では、まさしくわれわれが普段使っている意味の通りのようだが、加えて"give him a lecture" というと彼に小言を言うということのようだから、誰かに何かを伝えて教えるということが、"lecture"という言葉の意味するところらしい。

ところが、フランス語の辞書の最初に出てくるのは、"action de lire"= 読むこと、とか"action de déchiffrer"= 解読すること、ということである。まさに本を読んで物事を調べる部屋ということが、"salle de lecture"の意味するところらしい。ちょうど図書館の閲覧室そのものにあたるのがわかる。辞書にはこの後に続いて、聴衆の前で大きな声で読む、テキストなどの分析や解釈と出てくる。"lecture"という言葉が、普段われわれが使っている範疇の意味を超えて、とても広がってゆくように感じて、何だか得をした気分になる。

(二面に続く)

文化の振興に細々と邁進している当からす新聞社であるが、いよいよ映画の分野にも進出することに決定した。詳細は未だ詳らかにはできないが、世界から参加を募るオープンなイベントになる予定である。諸君、心して待ちたまえ。

からす国際映画祭開催？



第5巻第1号
通巻第49号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社
 からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせ

mail : colors@go-karasu.com

この国も恐ろしい国になったなあ。新聞やニュースを見てみると、そう思うことが少くないのは私だけではない。わけのわからない殺人や傷害、放火や強盗、詐欺に変質者。こんなにとんでもないことはかり起こっているのでは、私のような小心者は安心して表を歩けやしない。しょうがないから、我が家を中心に半径百メートルほどの範囲に絞って行動するようにしている。四十年以上も住んでいるのだから、熟知している地域、どうか、それなりに無事に日々を過ごす。

時々勇気を振り絞って、その距離を五百メートルほどに延ばしてみる。すると、煙草屋・単車屋・肉屋に八百屋、郵便局に銀行・コンビニ、などなど、生活に必要な基本的な用件はクリアできる。しかしながら、行動範囲を広げると、無謀な自転車やら、携帯片手に電話しながら車を転がすおねえちゃんやら、目つきかならぬおじさんやら、危険事項に遭遇する確率も高くなるので、より一層の慎重さが要求される。憶病な私は息を潜めて、事件に巻き込まれませぬようにと祈るような気持ちで静かに移動。その甲斐あって、今日も無事に一日が終わろうとしている。

しかしながら、家に帰ってきたとて安心ばかりもしていない。阿佐ヶ谷南には連続放火魔が出現しているが未だに捕まっていけないし、我が団地内にもグリーン・マンと呼ばれる変質者(らしき人物)が徘徊していることがある。貧乏な我が家であるが、間違つて強盗に入られない、という保証はない。そう考えると、眠るに眠れない腰抜けの私。今日も睡眠不足に悩まされ。

ひよんなことで葛藤が生じることがある。どうでも

今日の紙面から

- 二面 オープン面
- 松本と話そう(ノンパン)
- 三面 芸術面
- レイズ・ギャラリー
- 四面 からすライブラリー
- CD、ジギー・スターダスト
- 本
- 映画、ジュエルに気をつける
- 五、八面 (二年ぶり復活)
- 書き初め大会
- 一〇面 社会面
- やんばの天誅



いろいろな例を挙げると、倒れている自転車を発見したとき。例えば、これが自分のものであればすぐ立てし、知人のものであってもそうする。先程も、隣家の玄関脇の自転車が倒れていたのて起こしておいた。ところが、見知らぬ場所の誰のものとも知れぬ自転車の場合、どうだろうか。そんなときに、私の中に揺れが生じる。

孟子が性善説を、荀子が性悪説を唱えた。その後、あれこれ議論があつたにせよ、結論は出ていない。結論が出ないところが哲学の面白さのひとつだ……というような話は脇に置いておくとして、性善や性悪について考えるには、まず、何が善で何が悪かを考えなければならぬことは明白。論じ始めるには、紙数も時間もあまりに足りない。

自転車を戻ろう。私が倒れている自転車を立てるのは、なぜか。それは自転車が汚れるのを好まないとか、次に乗るときに不都合だから、とか、そんなことだろうか。いや、それよりも、ほとんど習慣の問題だと言つてもいい。あまり考えることなく、行動している。友だちや近隣の人々が所有する自転車に関しても同様。ある種の「善」意で立ててしまつて。その前提には、自転車は常態では立っているべきだ、という常識のようなもの。ところが、知らない人の自転車の場合は微妙である。眼前で倒れてしまったものは、躊躇せず立てておけばいい。けれども、通りがかったときに既に倒れた状態にあつたときにはどうだろうか。私の常識では自転車は常態では立っているべき。したがって、それを立てることは、所有者を助けるささやかな、善行である。

(最終面に続く)

からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。



"Ste-Geneviève" (サン・ジュンヴィエーブ) 図書館の
"salle de lecture Henri Labrouste (アンリ・ラブルーストの閲覧室),
1867; Bobliothèque nationale de France"

(一面から続く)

最近、と言っても1994年のことだからいい加減に時は経っているのだが、フランスは新たな国立図書館を、セヌ川の河畔に新たに作った。専門の研究者のみならず、一般の人びとに開かれた図書館とすべく様々な試みがなされている。莫大な蔵書を、建物の四つのコーナーに設けられたタワーに収納し、最新の検索機構を取入れ、必要図書を手早く入手するための搬送システムも整備されている。大きな中庭は、自然の森を再現しようと、樹種や土壌を細かく分析して選び、飛来するであろう鳥の種類も綿密に計画されている。"現代"という社会が、多数の案の中から選び建設した図書館である。

ちょうど、"Ste-Geneviève" (サン・ジュンヴィエーブ) 図書館を訪れたとき、図書館の引っ越しの最中で、ほとんどの蔵書は運びだされ、閲覧室の役割もひとつの時代のおわりを迎えようとしていた。"salle de lecture Henri Labrouste" (アンリ・ラブルーストの閲覧室) は改装中だった。もうひとつの楕円形をした閲覧室には入ることができた。繊細な架構ではないが、どっしりとした組石造の空間は、時間の積み重なりを感じさせる。新図書館に多くの蔵書が引っ越した後も、美術や建築の本の多くはここに残り、閲覧できるという。粋なことではないか。そんな場所で数時間でも古い本を眺めているだけで、街中を散歩するのはまた違った、その都市の深い印象がつけられる。しかも、図書館利用のカードを、その場で発行してくれもした。ラブルーストの部屋は、新しい機能を与えられるのだが、もしかすると講演の部屋になるかもしれない。

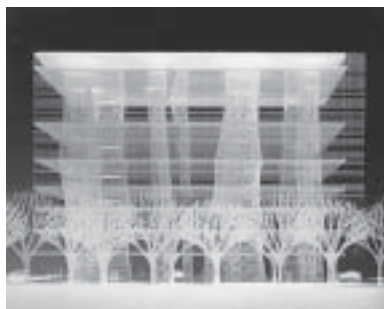


フランス国立図書館の断面図

東北は仙台に、Mediathèque (メディアアテーク) という建物が登場した。2年くらい前のことである。"Bibliothèque" (ビブリオテーク：図書館) と "Media" (メディア) を合わせた造語であるが、この名称が建物のコンセプトをあらわす。企画展示や市民の発表の場、コンピューターを使った外の世界との接触や、創造、伝統的な図書館の機能、音楽や映像、身体芸術やパフォーマンスに対応できるスペースなど、さまざまなコミュニケーションの可能性をひとつの建物にパッキングしたようなものだ。国家の中枢の図書館と、地方都市の市民に開かれたメディアアテークという、実験のフィールドの違いこそあれ、フランスの国会図書館より、さらに未来を展望した図書館と言えるかもしれない。

建物も、見慣れた普通の建物とは随分異なる。ガラス張りの9本のチューブ状の構造が、上部から光を取入れたり風を送ったりして、自然の環境を取入れる。またあるものは、階段やエレベーターのシャフトとして、その中を人びとが行き来する。チューブを通して、階を越えて視線が交錯して、図書館の椅子で居眠りをするひとが見えたりする。これらすべて、メディアのミックスである。

四角い外観とは裏腹に、至るところに柔らかない曲線が使われていて、部屋の仕切りは必要に応じて変わっていいんだ、というメッセージを発している。壁が無く、家具が置かれることでそれぞれの場所がつけられたり、徹底して固定されていない空間は、建築も変容したいと言っている。メディアのなかを人びとが自由に泳ぎ回るというイメージ



仙台
メディア
アテーク

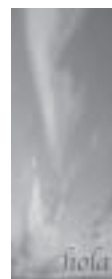
である。もっとも、本来、"Mediathèque" というような名称は、具体的な場所をもつことのない、メディアの空間にこそふさわしいようにも思う。固定されたひとつの場所をつくらなければならぬこと自体が、建築たる矛盾を孕む。

しかしこの建物は、この街の人びとに新たなものをもたらしたようだ。

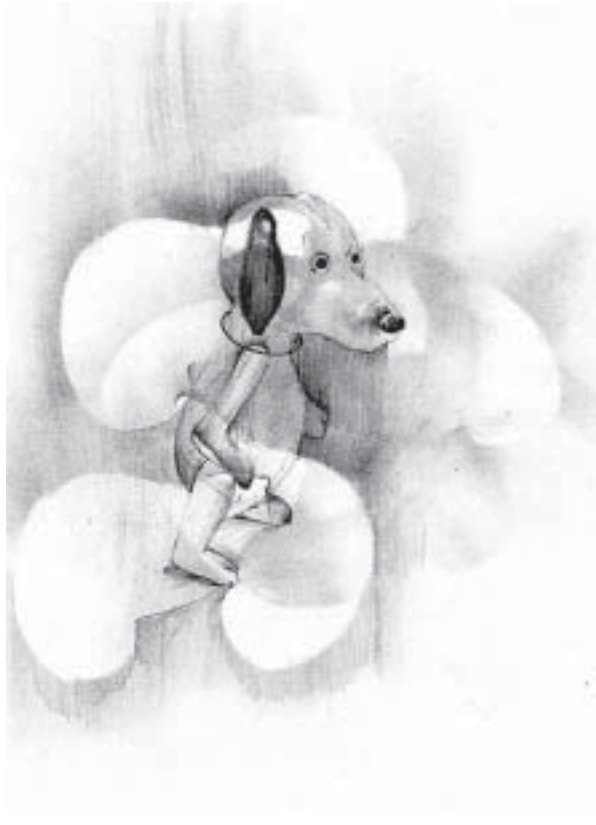
"Mediathèque" は、両側に立派なケヤキ並木が続く、市の目抜き通りに面している。人びとは、目抜き通りから誘われるようにこの建物の中に入り、自由に気の向くままに、行きたいフロアーに行き、本を読んだり、音楽を聞いたり、コンピューターに触れたり、あるいは、ただ

ソファに座って柔らかな日差しを浴びながら外を眺めていたり、まるで、都市の公園にいるかのように振る舞っている。かつて、古典的な図書館において、人びとが書物を巡り、知識の森を散歩したように、いま、人びとは、都市空間の延長としての "Mediathèque" を散歩して、オーバーラップしてひろがりゆくメディアの空間に浸透してゆくのである。

(篠崎健一)



Rei's Gallery



マイ スヌーピー

先日ヤフーオークションで、あるものを落札。それは、ただ今マイブームである、スヌーピーのプラスチック人形。はつきりいって、ちっとも可愛くないし、今世に出回っているキャラクタの「スヌーピー」とどこがちがう。「ニセモノ」と言われてもしようがない。でも、これは本物(タブンネ)。一九五〇年代のスヌーピーは四足歩行でイヌらしい姿だったんです。別に私がスヌーピーコレクターだという訳ではなくて、昔のピーナッツコミックを買って読んでいたら、どンドンピーナッツの世界に引きずり込まれたという感じ。何がそうさせたかというところ、このコミックの笑いは暗い。なのに、作者の描く線が優しい呼吸で引かれている。線は呼吸だと、私は思っていて、この作者はブラックユーモアを頭に浮かべながらも、ゆったりとした呼吸で線を走らせ私達にメッセージを投げかけている。私も深呼吸しながら、我が家に来たスヌーピー人形を描いてみました。

「なぜ人を殺してはいけないのか。」なんてのが確か一昨年頃に岩波新書かどっかそこら辺から出てそこそこ売れていた。そう、そんなくらい人命は今や尊重されなくなってしまっている。僕が子供の頃、人の一人の命は地球より重い。」なんて当時の法務大臣かなんかの発言を受けて真剣に考えた頃が嘘のようだ。確実にオヤジとなった今、これは言い過ぎだろう、と考えられる。クソミソのように自国民を米軍の原爆によって何十万人も喪失し、南京虫のように中国民を数あまた踏みにした太平洋戦争をまだ引きずっていた時勢(一九七〇年代)もあったのだから、と背景の推測もできる。が、しかし、子供の時に覚えた不思議な説得力が未だにまだ身体のとどこかに残っている。あれはいつた何だったのだから? 語った大人達の本気の気持ちのせいもあったのだから。と同時に子供ながらのより生命を意識する、そして大人よりも逆に考えるならばより死に近い直感が何かをキヤツチしていたようにも感じる。確かこんな感じだった。「死んだら真っ暗やみになつて何も無い。だから地球自体も見えなくなるし、死んだら地球そのものの意味もなくなるはずだ。だから、死んだその人にとって地球なんて意味ないものになるんだらう。」そう、いま思えばよくあの頃よく親にこつ訊ねていた。「目ば開いたまま死ねば死んでも明るかかね?」そう、そうすると地球より個が先だと

松本と話す「オムボンパイ」



いうことになる。が今はそう思っていない。今は人の「地球V(大なり)命」だと思っている。なぜならオレ等は地球の一部であるけれど、細胞の一部であるけれど、その他の地球の一部である生物として地球自体の命さえ脅かそうとしている。まるで癌細胞のように。ほんと癌細胞って馬鹿だよ。のさばればさばるほど結局、自らも死に向かつて行っているのにまるで気がついていない。自分の生命の異常なまでの成長と肥大化しか考えてない。今のオレ等人間のように。そして笑えることに、近年、急速に人間での癌死亡率が格段に高まっている。三人に一人は癌で死んでいる。いいきみだ。そして悲しい。きつと癌って心の病なのだから。これを見ているお医者さんがいたら調査してみたらどう? 生への執着が強い人ほど発ガン率高い筈だから。今の人命軽視の風潮は人命重視ゆえに生じていると考える。これも生活習慣病だな。警沢病。ついさっきのニュース。前橋でスナックにいた元暴力団組長が何者かに銃撃され、重傷を負う。その際、客でいた一般市民が巻き添えを喰らい三名死亡。暴力団抗争での巻き添え数としては過去最多。

ジギー・スターダスト (the Rise and Fall of ZIGGY STARDUST and The Spiders from Mars)



デビッド・ボウイ

David Bowie

1972年、東芝EM、B00005GL60

同じとき、カッパの彼女は重大な決意を胸に実家近くの産婦人科にいたのだ。もちろん彼にはその場において欲しかったが、連絡が取れない。あまりの重荷に訳がわからなくなってしまうカッパは、逃げ場を探して私とともに『大将』で明るいうちから一杯やって

まだヴィジュアル系という言葉が生きていたころのこと。その道を目指していると自称する通称カッパ君という青年がいた。私との繋がりは薄いはずの彼がある日電話してきて、何かお薦めの音楽はないかという。一体どうしたことがこのアルバムである。元祖ヴィジュアル系などというはるか以前に、ロック史上に燦然と輝く不滅の名盤であることを疑う人はいないだろう。



(望月)

ジュエルに気をつける



(One Night At McCool's)

監督：ハラルド・ツワート

出演：リヴ・タイラー、マット・ディロン、ジョン・グッドマン、ポール・ライザー、マイケル・ダグラス

2001年公開(アメリカ)

DVD：ボニー・キャニオン

三人がジュエルに振り回され、それぞれに身の上を語る相手を求める。恋する者が話したがりになるのは、洋の東西を問わぬのか。話相手は、殺し屋・神父・精神科の女医という具合で、設定からして狙い過ぎだが、悪くはない。各々が自分の思い込みを元に物語を説明していくというスタイル。記憶の混乱や視点の違いもあり、同じ出来事のはずなのに少なからずちぐはぐ。それぞれの人間にとっ

妖艶な美女に振り回されるおばかな三人の男という、ありがちな線。本当に絶世の美女によって演じられていたら、こんなに楽しくはない。リヴ・タイラーがチャーミングな何かを持っているのは間違いないが、美人とは明らかに異なるし、スタイルに至っては女優よりは女子プロの方に近いのではないかと、というふうな。いや、だからと言って、魅力的じゃないのかと問われれば、それはそれで大きに魅力的のだが、いわゆるステレオタイプな美人女優でないことは確かだ



て、世界ってのはこれぐらい違って見えているものかもな、と。私としては、会話の方にももう少し強引な展開があっても良かったかな、と思わなくもない。それほどに灰汁が強くはないところが、この映画のほのほとした良さでもあり、微妙な物足りなさでもあるのだろう。

音楽の趣味もぼちぼち。ちょっと自分でも演ってみたくなるような音もちらほら。余談ですが。

(全太)

数年後、今度の子は命を授かり、結婚し、カッパはろくに働かず、それでいて新車のRX7を買い、嫁さんはいに愛想を尽かして子供を連れて実家に帰った。

サーペントインギャラリー パピリオン 2002

伊東豊雄 + セシル・バルモンド

ISBN4-906544-81-9

telescoweb.com

Walther Koenig Books at the Serpentine Gallery



Books

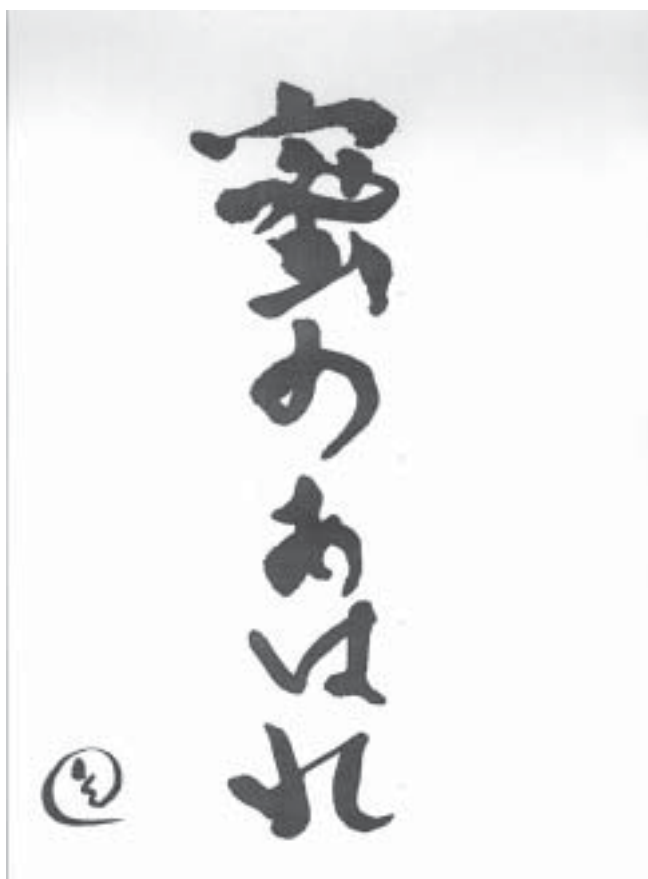
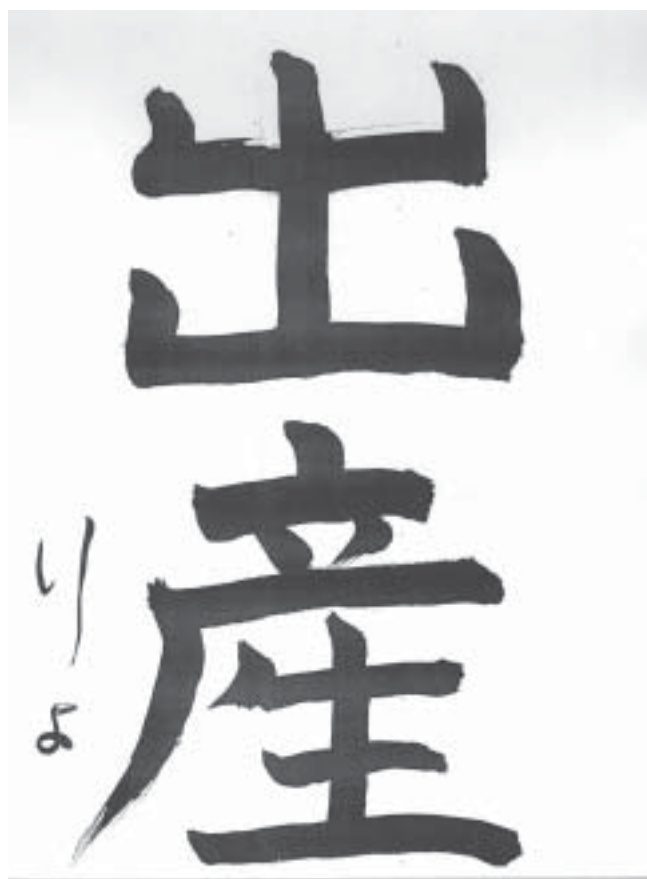
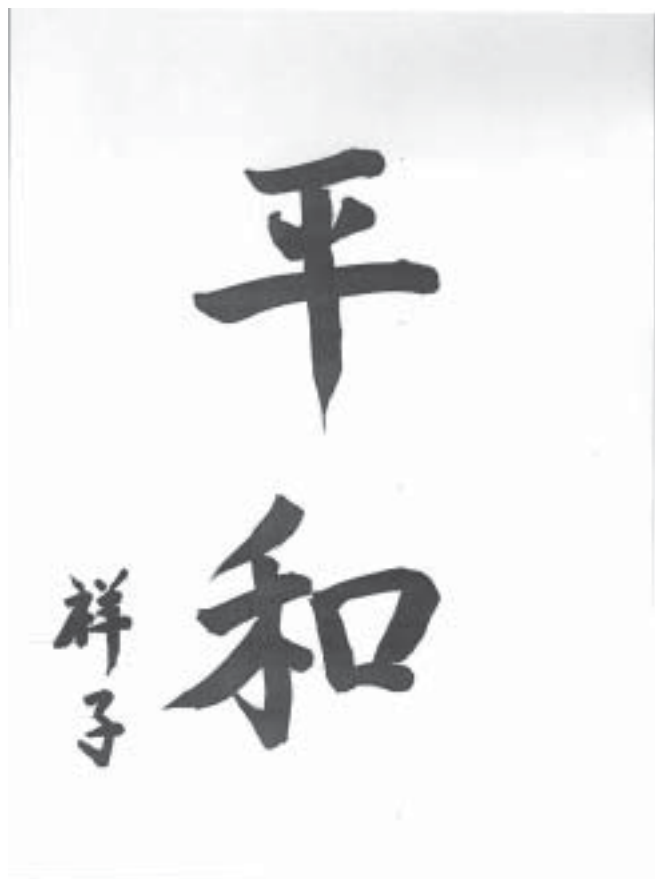


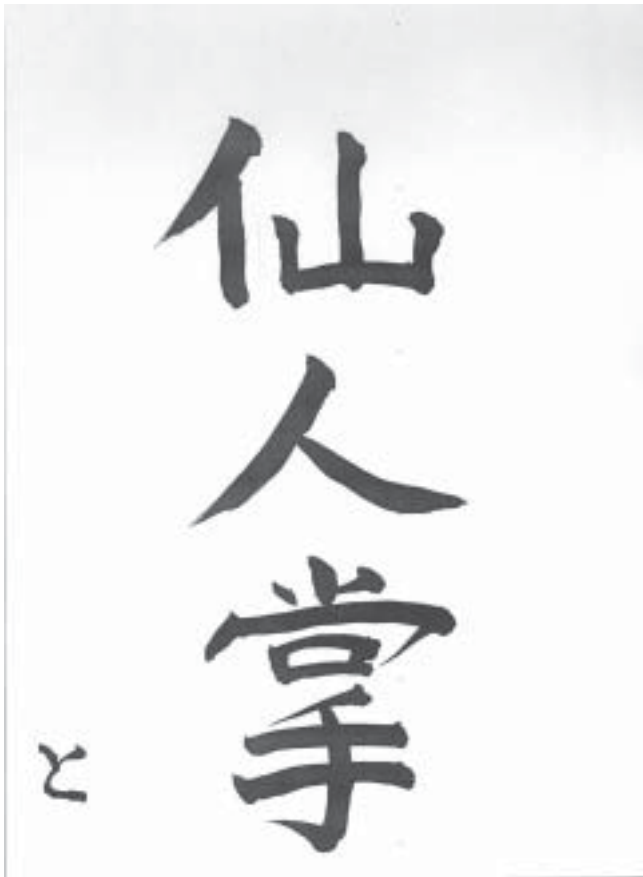
飽きもせず、またアーキテクチャーのお話。文庫本サイズの銀色のカバーもかわいらしい、奇麗な本である。建築家伊東豊雄が、昨年、ロンドンのギャラリーのために、テンポラリーなパピリオンをつくった記録である。変わった建物である。四角い箱に、いろいろな方向にぐるぐるを紐を巻き付けるように、一筆書きをしてゆく。紐の替わりに鉄板を使い、模様のようにできた、多角形の隙間に、ある場所にはガラスを、あるいは鉄板を嵌め込んだだけである。

普通の建物は、床があって、柱があって、屋根があって、それぞれが順番に、それぞれのつくりかたでつくられているのに、この建物は、それらが全て、同じ造り方で、順番も区別もなく造られている。実体としての建築が、数十年の醸造期間を経て、現代の思想の一端を、それでも鮮やかに、実現した。

(篠崎健一)







三億円

裕子

幻

健

逃生

淳

七活

千金

真



Drawing as Thinking

先日学校に大遅刻してしまつた。先生が思つたよりも優しかったのでちよつとホツとした。と言つよりも、早くも諦められたのか? 何故だか、今はDrawingの科で勉強中。これは一年に一度、一タームだけのサブジェクトを取らなければいけないと言つても。美大に通っているくせに、前から世間一般で言うアートの(絵画やオブジェクト)って何なの? そんな疑問を解決するために、選んでみたのがDrawing

さて、このDrawing、始めて見るとなかなか結構、興味深い。油絵書くのも、彫刻作るにも、デザインをするにも、基本的には全ての基礎となる物なので結構重要らしい。自分のアイデアを人に見せるのにも使える。見栄えは良いに越したことはないのだ。授業ではもちろん描く練習も沢山させられたりするのだが、それとも一つ、大切な目的がある。Drawing as Thinking、自分のアイデア、思いの出発点、もしくはそれらを発展させる形にする場所としてのお勉強、その日はその個人プロジェクトの進み具合を先生に見せ、アドバイスをもったり相談する日だった。プロジェクトは、あらかじめ与えられた約六〇単語の中から、自分の普段のサブジェクトに関する意図や認識にしたがつて一〜三つぐらいの単語を選び、何かを作るといふもの。最終的に出来上がるものが、Drawingである必要はないらしい。必要とされるのは選んだ単語がアイデアの出発点、又は発想の変化の中の修正点、として働いているか。要するに、どの様にその単語を膨らませていき、面白いことが出来るか? 言葉遊びと、哲学。僕は少し行き詰まっていたので、プロジェクトというよりもっと根本的な話を中心に先生とした。

改めてこの「Drawing as Thinking」のスタート地点を確認する感じ。もともと自分が理屈っぽいせいなのか? やっぱ面白。そして難しい。その昔、ThinkingなんてキヤッチコピーをAppleが使っていたのを思い出した。あれのコンセプトは「Drawing as Thinking」のそれと同じだったに違いない。真っ白な紙に鉛筆やペンで何かを書いて行く行為。紙に書かれた線が何かを形どつて行くかもしれないし、他人が見たら何が何だか訳の分からない物になるかもしれない。要するに全てあなた次第だということ。何かが出来る環境はそろっている。そこから何が出来るかは自分次第。自分がどのぐらいの物が作れるかどうかは置いておくとして、スタート地点にあるその可能性の大きさが僕を、どこまでワクワクさせてくれるのだ。真っ白な原稿用紙に、何も無いところに、ペンで文章を生み出す人がいる。音の無い所に、音楽を創り出す人がいる。そんな事と同じようなワクワク。若干お高くとまった感はある物の、今までイマイチ信用できないと思っていたアートな物達にも、そんな一面があることを教えてもらった気がした。言葉を使って何かを表現する文学。音、又は言葉を使って何かを表現する音楽。そんな物と全く同じように色、形で何かを表現しようとするのが、絵画であったり彫刻なのだと、再認識できた。

もちろん、全ての芸術に理由や哲学が無くてはいけないと言つてはいないし、何かが好きなのに理由が必要な訳でもないだろう。ゼロから何かが生まれるというエネルギー、その思い、そんなものが伝われば僕には十分なのだ。で、それが好きなものだったら最高。他にせよ、この歳で何かを学ぶ、考えると言つ事が「面白い」と感じるのには幸せなことだ。そんな理由からか、帰り道はやけにウキウキしていた。家に帰って、前にもらったプリントを読み返してみる。ステレオから流れるJon Mitchellがやけに心地よく聞こえる。煙草に火をつけた瞬間に、お気に入りの曲が流れた。

(神山朝人)

"...everything has some kind of essence that can be reached through human thought.Thought is the animator." -Bill Viola. Reasons for knocking at an empty house.-

"Once you begin to work with time as an elemental material, then you have entered the domain of conceptual space. A thought is a function of time, not a discrete object. It is a process of unfolding, an evolving thread of the living moment." -Bill Viola. Reasons for knocking at an empty house.-

おまけ。
"Drawing as Thinking"って何? もらったプリントの引用から。

'Drawing as thinking' - an investigation of the visible and the invisible. The unnameable, the familiar, the forgotten, the felt, the smelt, the touched, the heard, the tasted.

借金取り立て代行いたします

あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。
あなた一人で悩まないでください。



相談無料
秘密厳守
防犯用品販売・防犯対策指導も致します。

produced by
P.D.Agency

tora@pda.co.jp
1843 N. Cherokee AVE: APT. #216
Los Angeles: CA 90028, USA
voice : +1-310-493-1001
facsimile : +1-323-466-5645

ヤンヒポの天誅 どいぢれる

杉並近辺の住人は、x x五差路脇にあるx xヘルスクラブという名前に心当たりがあるだろう。

ちよとどその裏手にいかにも戦後すぐに建築されたであろう長屋形式の「x xセンター 飲食街」という細い路地がある事に気づく。今まで何度となく五差路を通ってきたが、こんな小路地があった事には気が付かなかった。今では、飲食街という名残はほとんど無く、古びた雀荘と新しい生活に移行出来ず、墓穴に入るのを静かに待っているような住人がひっそりと暮らしているといった風情だ。その中の一件が金山の実家である。小路地に足を踏み入れると赤いポストに金山の文字を発見した。そこは今、華道教室を開いているようだ。ポストを見ると水曜と木曜が華道教室の日になっているらしい。今日は水曜だから誰か居そうな匂いがする。ただ、金山本人が昭和六年生まれという事を考えると親の世代が住んで教室を開いているとは考えにくい。金山本人でも無さそうなので、兄弟か、妻あたりが細々と開いていると思われる。これも後に判った事だが、華道教室は金山の妻が水、木と自宅から出向いて来て生徒に指導しているとの事だ。しかし、腑に落ちないのは、自宅とのギャップである。自宅は普通以上に立派なものであり、実家は今にも取り壊されてもおかしくないような建物だ。常に誰かが住んでいてこの有り様だとすると、金山は一切面倒を見ているとは思えない。本人だけイイ思いをしている事になる。もし、そうで無いとすると、実家をなんらかの目的でそのまま残してある事になる。実家へいきなり尋問を敢行する訳にもいかなないので、しばらく様子を見てみる事にした。もしかすると華道の生徒でも出入りするかもしれない。もし生徒に出くわしたら、巧みな話術を駆使して少しでも内情を聞き出せるかもしれない。

長屋形式の「x xセンター 飲食街」という細い路地が・・・今では、飲食街という名残はほとんど無く、・・・墓穴に入るのを静かに待っているような住人がひっそりと・・・その中の一件がx xの実家である



主とそれを押す小柄な配達員が華道教室の方へ近寄っていった。配達員は相変わらずやかましい台車に小型のテレビがなんとか収まるぐらいの段ボール箱を二つ運んで来た。行き先はやはり華道教室だ。当然、運ばれてきた箱の中身が大変気になるし、いったい受け取るのは誰なのだろうか。当然ながら、こちらが監視している事など気がつく由も無い。しかし、たまたま監視についたそばから荷物の配達を目の当たりにするとは驚きである一方、ひよとするとかなり頻りに荷物の授受が行われている可能性も大なのだ。そういった側面から金山家の経済活動を伺い知る事が出来る。いずれにしろ、箱の中身を確かめない事には始まらない。方法はいたって簡単なものを選択する事にした。早い話、配達員を捕まえるのだ。さすがに華道教室の前という訳にはいかないで、例によって騒がしい台車の後を少し追いかけて、大通り(x x通り)に出るまで待つてから

声をかけた。

ヤ：「ちよとど、おにいさん、おにいさん」
配：「はっ、ハイ」
ヤ：「今さあ、あそこの華道教室に配達したよなえ。」
配：「はっ、ハイ」
ヤ：「半紙でも届けに来たの？」
配：「いつ、いえ」
ヤ：「あつそうなんだあ。ぢゃあ何持ってきたわけ？」
配：「はっ、あ〜」
ヤ：「ん？」
配：「たつ、多分、ビデオテープだと思います」
ヤ：「ふ〜ん(ピンコ)」
ヤ：「ぢゃあ、優音死てだあ」
配：「そつ、そうつす」
ヤ：「社長居た？」
配：「いえつ」
ヤ：「ぢゃあ、カミさんが受け取つたの？」
配：「いつ、いやあ、あの入奥さんかなあ〜」
ヤ：「で、オタクはどこの人？ あ〜、車に社名書いてあるなえ。松本運輸なんだあ。つて事は配達だけなのかなあ？」
配：「あつ、ハイ、そう、そうなんです」
ヤ：「ぢゃあ、その伝票見れば送り主も解るんだよねえ」
配：「あつ、いや、この伝票ぢゃ、解らないんです」
ヤ：「ああん、なんで？ オタク配達業者でしょ。送り主解らない荷物を配達したりしないでしょう」
配：「あつ、いや、そういうわけぢゃあ・・・」
ヤ：「ああん、ぢゃあ、なんで解らないのあ？」(実はこの配達員の胸にささっていた伝票を抜き取つた)
配：「あつ、あああ」
ヤ：「ああ、なるほど、これだけの配達伝票だ。オタク、専属の配達業者だなえ」
配：「あつ、ハイ、でも完全に専属というわけぢゃないんですけど・・・」
ヤ：「でもこの記号で荷主は解るんだよねえ」
配：「はっ、ハイ、解ります」
ヤ：「で？」

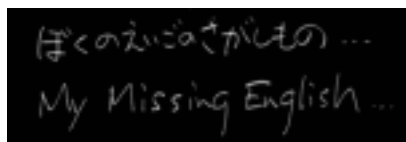
配：「はっ、これはビクターのからの荷物つす」
ヤ：「ふ〜ん(ピンコ)」
配：「この後ろのYAJっていう記号はビクターの商品っていう事なんですよあ」
ヤ：「ふ〜ん、そうなんだあ、で、荷主の電話番号は？」
配：「はっ、ああ、たしか、え〜と〜」
ヤ：「運転席に携帯置いてあつたよ。変わりに俺が見よつか？」
配：「いつ、いや、あれは自分のなんで・・・」
ヤ：「ふ〜ん、そうなんだあ」
ヤ：「・・・で、荷主は？」
配：「あ、解りましたあ。X X - X X X X - X X X Xでした」
ヤ：「なんてとこ？」
配：「渡辺商会です」
ヤ：「うんぢゃ、オタクとは違つとこね」
配：「はっ、ハイ、うちは配達だけつすからあ」
ヤ：「あつそう。うんぢゃあ、ここへ聞けば優音さんこの事解るよな」

(最終面に続く)



赤いポストにx xの文字を発見した。そこは今、x x教室を開いているようだ。・・・しかし、腑に落ちないのは、自宅とのギャップである。

play the guitar, play a guitar



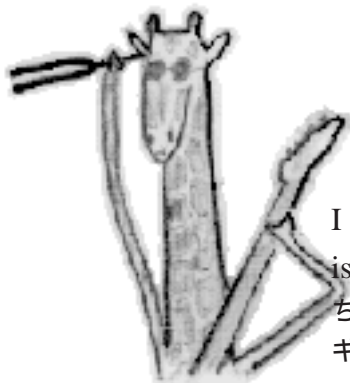
学校英語にわすれものありませんか？

PIGGY's How to Play the Guitar

ピギー先生のギター教室

Why don't you play the guitar with us?

なぜあなたは私たちと一緒にギターを弾かないのですか？



I cannot play a guitar which is not properly tuned.

ちゃんとチューニングしてないギターは弾けないんですよ

properly = 適正に
tune = 音を合わせる

基本は play the guitar 。

「ある種のギター」なら play a guitar も。

プロのミュージシャンなら play guitar も。

a は特定しない一般、the は特定の「その」 というのが冠詞の一般的なルール。だが、だとすると「楽器を演奏する」を言うとき、必ず the をつけて “play the (楽器)” にするという中学で誰もが習うルールはどういうことなのだろう。

一般ルールに従えば、

George plays a guitar.

「ジョージはギター弾くんだけ」(どの種類のギターかはわからない)

George plays the guitar.

「ジョージは(例の)そのギターを弾いている」

でいいはずなのに、は間違いで、a は the にせねばならず、だけが正解ということになっている。学校では有無を言わず“覚える”だ

が、なぜこういうことになるのだろうか。

「この場合の “the guitar” は、ある楽器の総称として『ギターというもの』を意味する」と説明できる。だが、総称なら a でもよい。というわけで、結局「慣用的に」と説明するしかない。

一方、こんな説明もある。「そもそも楽器を演奏するには特定の“その”楽器があるから」。ずいぶん昔には楽器は演奏者だけのもので、その名残というわけだ。モーツァルトは自前のピアノを持ち、琵琶法師たちだってみんな自分の琵琶を抱えて行脚した。

しかし、play a guitar の例もないわけではない。「ある～の類いのギター」と説明がつく場合である。カタコンベのセリフがそれに当たる。

I cannot play a guitar which is not properly tuned.

私は調子の狂ったギターは弾けない

この場合、a は一般ルールに従った「特定せず、調子の狂ったギターはどれでも」という意味を表す。特定の本のギターを表す次の例と比べてほしい。

I cannot play the guitar which is not properly tuned.

私はその調子の狂ったギターは弾けない

ただし、the も a もつけない例もある。プロの演奏家による場合である。その場合 guitar は抽象名詞である。目に見える楽器という物体のイメージではなく、発せられるギター音楽そのものを表現していると考えられる。



Piggy played guitar . . .

ピギーがギターを弾いた . . .

(一〇面から続く)

配：「あつ、多分解ると思います」

ヤ：「りょうか、い。悪かったねえ、忙しいところ(ここで肩を軽くたたいてやった)」

配：「あ、とんでもないです」

ヤ：「まあ、キミには迷惑かけないから心配しなくてイイよ」

配：「そつ、そつなんすかあ」

ヤ：「大丈夫、大丈夫」

配：「わつ、わかりました」

ヤ：「それぢやつ、どうもありがとねえ」

配：「いえいえ、なんか調べてるんすかあ？」

ヤ：「余計な事は言わない方が身のためだよあ配：「.....」

これで、金山は現在でも健全に商売を続けている事がはつきりした。しかもオンボロの実家を完全に事務所としているのだ。なるほど、さすがに年の功だ。表向きは質素な事務所構えて同情引いておいて、裏ではキャデを乗り回すか。イイ度胸してるぢやないか、...

さて、前に話したかどつが忘れたが、土地や建

(一面から続く)

という認識。しかしながら、これには疑問がある。所有者は自転車を意図的に倒しておいたのではないかとしよう。人の想いは、他者からはおよそ計り知れぬものである。自転車を倒しておくことに美を求めている人がいない、とは限らない。「善」行のつもりだつたに、単なるお節介のこんこんちぎだ。そんな可能性だってなくはない。

倒れている自転車の如きもの、どんな結論であつてもかまわんよ、という声が聞こえそう。いや、寧ろそんなことを気にして時間を潰している私のおつことは少々緩んでいるのではないかと、だが、待て、これを他の物に広げてみようではないか。他人が「善」と信じて疑わぬ行為が、当事者にとっては迷惑である、という場面、想像するのは簡単だ。例えば、世界の警察を名乗る組織が貧しい村に爆弾を落とすこと。例えば、マスコミが拉致被害者やその家族の望んでいないインタビューを報道すること。例えば、政治家が国益のためにと称して国民を喰い物にすること。いくらでも思いつけるではないだろうか。

絶対の結論に至らないことが哲学の面白さのひとつだと書いた。実際そつなのだが、私たちは、今、この

物、会社組織などは基本的に公開情報である。土地の所有者や会社の役員などは、法務局等で正規の手続きを踏めば誰でも閲覧が出来る。しかし、自動車のナンバーも同様である事を知っているだろうか。よくテレビでタレントの車のナンバーをぼかしてあるが、あれは単にタレントの車だとバレない為ではない。あの番号から登録の名前や住所が全て明らかになるからだ。だから、女性は車を買う際は十分気をつけて欲しい。一人暮らしの住所を日本中に言いふらして歩いているようなものだから、...

話がそれってしまったが、金山のキャデについてモナンバーが解っているので早速陸運局へ行き、車検証と同じ内容の証明書発行を申請して入手した。何度もうかが、窓口で本人確認の為に運転免許の提示は求められこそしたが、それ以外は何も聞かれず発行してくれるのだ。自分だったら自宅の住所や本名で登録なんか絶対出来ない所だ。事実、自分は現在も販売店名義の車を乗り回している。ナンバーからヤンヒボは絶対追えないのだ。またまた話がそれたが、車検証と同じ内容の証明証からも色々な事が解る。まず、使用者名、これは金山になっている。車自体の年式が二〇〇二年式という事は新車のキャ

瞬間も生きている。生きている限り、何かをばねなければならぬ。倒れている自転車を見たら、起こすか放置するか、ふたつにひとつ。「善」の何たるかがわからなくとも、現実目の前にある。一秒一秒精緻に考察しながら行動するのは不可能かもしれないがひとつひとつの自らの振る舞いには自覚と責任を持つことが必要だ。そのためには、今まで当たり前のこととして過してきたことを吟味する必要がある。あなたの善を省みたまえ。

なぜ、こんなことを考えたのだろうか。そつそつ、世の中に恐ろしい事件が頻発しているからだ。そうだったのは日本の警察が犯罪者のわずか二〇パーセントしか検挙できなくなつてしまつたからアメリカより酷いのであるぞ。五人に一人しか捕まらぬのなら、あれだつてちよつと悪事に走つてみようかな、という輩が増えてもしかたないからだ。そういう輩が増えたら、ますます恐ろしい世の中になつてしまつたらだ。以下、ループ.....だが、待てよ、そもそも悪つて何なんだろう。

そんなところから、始まつた本日の一席、笑えませんか。笑えませんか。あはははは。(全太)

デラックを買つたという事だ。登録日が八月半はなので二〇〇二年八月に金山が新車のキャデラックを買つた事は明らかだ。車体価格は大体八〇〇万弱だろうか。ただ、所有者が世界信販(株)となつている事から、金山がクレジットを組んで買つた事も判明した。

これで、さらに色々事実に近い推測が出来てくる。多かれ少なかれ中小企業の社長はいかに税金が少なくて済むか、税金を払うぐらゐなら買い物をしてしまおうと考えている。だから、中小企業の社長が乗り回す車はまず個人名義では買わない。会社の経費で購入する。そうすれば、ガソリン代から修理費、車検代や自動車税まで会社の経費として支払う事が出来、自腹を切る必要は全くない。しかし、金山はつい半年前にわざわざ自分名義で、しかもクレジットを組んで車を買つた。これが国産車や中古車なら自分の考えも違つたが、わざわざキャデラックである。この他に判断材料としては、会社登記上の所在地がたため。メインの取引銀行が何故か池袋。これは一時、金山が

編集後記

からす新聞第五巻第一号(通巻第四九号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇三年二月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。



Ken-ichi Shinozaki, architect

4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku, Tokyo 166-0015,

Voice : +81-3-3220-0644

Facsimile : +81-3-3220-0640;

e-mail: geta@geta-s.com

篠崎健一アトリエ

池袋でも商いを行つていたのであるが、未だにそこをメインバンクにしている。これらの証拠から導き出される推測を並べよう。まず車は会社名義で買いたくても不可能なのだろう。だから個人名義で買えない。登記上の住所やあさつてな所にあるメインバンク。これらから、税金の申告がかなりいい加減である事も予測できる。少なくとも数年は税務調査が入つた形跡はない。しかも、赤字決算にして税金を払つていないのだから、赤字の会社に高級車を現金でならともかく、リースやクレジットで販売する会社はない。だから、個人でしか買えないのだ。しかし、そこそこ商いをしているような優音なのだ。だから、利益は金山個人の懐へどんどん入つている事になる。早い話、会社を赤字にして、私腹を肥やしているのだ。確かにここ数年は経済状況自体深刻である。だから、弱小企業が赤字でもだれも疑われない。因に、後にも改めて書く事になると思うが、交渉の過程でわざと赤字決算したと金山にカマをかけたら、「いやいや、今年はずっとと黒字決算にするつもり」だと、語るに落ちたのだ。天誅の日も近い。